

水は、人の命を守るものであり、また命を奪うものでもある。私は、二つのケースを例に、水について私が考え行動したことを書くように思う。

「み、水、みず」うめく妹に、母は、ずっとペットボトルのキャップに水を入れて少しずつ飲ませていた。たった六百五十グラムの水が失われただけで、こんなにも人が弱ってしまうなんて。妹は、送迎バスに取り残されて、二時間半後に発見された。意識はもうろう、顔が真っ赤で熱もあがっていた。何より、ずっと水を欲しがっていた。症状からすると、妹が失った水の量は四〜五パーセント。体重が十三キロだった妹の身体からおよそ六百五十グラムの水が失われた。夜もうなされて元気になるまで何週間もかかった。今となっては妹も元気だが、この出来事は、私たちに水と命について考えるきっかけをくれた。

私たちが生きていくのに必要な水の量。これは、体重が多ければたくさん、水が必要になるが、体重一キロ当たりに必要な量は年齢が低いほど多くなる。一歳だと、百二十〜百三十五 μg 、六歳だと九十〜百 μg の水分が一日に必要な量になる。

私たちは、喉が渴けば自分で水分補給をすることができる。しかし、小さい子どもはそれができない。お年寄りにも難しい人もいるだろう。まわりにいる人が、お年寄りや小さい子どもに気を配っていくことが大事だと思う。脱水症の予防には、「こまめな水分補給」が重要だ。私たちは、常に水によって命を守られているということを自覚しなければならぬ。

二つ目のケースは、水難事故。毎年、水難事故によって多くの子どもが命を落としている。着衣水泳の教室に参加したが、服を着た状態でいきなり水に落ちると、浮いた状態を保つのがとても難しいことがわかった。妹のような小さい子どもは、浮き具がなければ浮くこともできなかった。川や海に近づかなければおぼれることもないが、川や海には、不思議な形の石があったり、砂の感触が面白かったり、本では学べないことがある。

これらの気づきから、私はライフジャケットステーションを設置する活動を始めた。人間は、肺に空気が入っている場合でも最大で人体の五パーセントしか海に浮くことができない。しかし、ライフジャケットを正しく着用していれば、生存率が四割から九割にまで上がる。また、水辺へ出かける時は、事前に天気や水辺の情報を調べて必ず大人と出かけることが重要だ。水辺へ出かける時の注意点を掲示し、ライフジャケットを無料で貸し出す場所を作るために、募金を集めたり、お小遣いを貯めている。実現まで、あと少し。

妹の事故をきっかけに、私は水の大切さと恐ろしさを知り、特に子ども達と子どもを守る大人に安全な水との付き合い方を知ってもらうことが必要だと感じた。残念ながら、私たちは当事者になるまで大切なことに気づきにくい。

今年も、一人でも、水の事故で亡くなる人が減るように、そしてきれいな水環境を守るために私ができることを一生懸命頑張っていきたい。